

# 日独戦役における 海軍病院船「八幡丸」の医療活動

柳川 錬平

順天堂大学大学院医学研究科 解剖学・生体構造科学

受付：平成29年3月21日／受理：平成29年7月13日

**要旨：**日独戦役における日本海軍病院船の医療活動については、開戦100周年が経過してもなお、未解明のまま医療史の空白部分となっていた。本研究では、病院船「八幡丸」についての詳細な記録を含みながら所在不明とされていた部外秘公刊戦史である『大正三、四年戦役海軍衛生史』が第二次世界大戦の後は米国議会図書館で所蔵されていたことを確認し、これを既存の史料とも照合しながら分析することで、「八幡丸」が展開した医療活動の実情を解明した。青島周辺で活動した第二艦隊のみならず南太平洋のフィジーまで進出した南遣支隊にも十分な医療支援を提供しながら、「八幡丸」は日本海軍病院船の歴史において近海仕様から遠洋仕様への一大転換点となっていた。

**キーワード：**八幡丸，病院船，海軍，日独戦役（第一次世界大戦）

## I はじめに

時代ごとに定められた戦時国際法<sup>1)</sup>の規定を満たすことで同法による保護を受けながら傷病者救護に専従する船は「病院船」と呼ばれ、単に診療機能を具えただけの艦船とは区別される。規模の大小を問わず診療機能を有する船に、広い意味で「病院船」の呼称を用いる場合もあるが、本稿では、国際法に適合した病院船のみを議論の対象とする。また、陸軍の病院船が戦地近傍の野戦病院で安定化処置まで完了した傷病者を内地へ後送することを主な使用目的としたものであったのに対し、海軍では洋上における野戦病院の役割も病院船が担っていたため、海軍病院船の方が医療資源は充実していた<sup>2)</sup>。そこで、本稿では主に海軍病院船について検討を行うこととする。尚、日本が他国の軍や暴徒に対して武力を行使した事象についての呼称は、それぞれの公刊戦史等<sup>3)</sup>で用いられているものを採用した。

日本は明治から大正にかけて、日清戦役、日露戦役、日独戦役（第一次世界大戦）、と10年ごと

に戦役を経験し、それぞれ少なからぬ犠牲を払ってこれらを乗り越えて来た。日本海軍は各戦役に臨んで1～2隻の病院船を運用してきたが、これらは全て民間海運会社から徴傭した貨客船を海軍工廠（造船部）等で艦装することによって賄われた<sup>4)</sup>。日本が経験した戦役の中でも、第一次世界大戦は、戦車、航空機、潜水艦艇、化学武器など多くの新兵器が実戦投入された結果、発生する傷者の規模や性質にも劇的な変化が見られ、結果的に医療技術にも進化をもたらしたとされる<sup>5)</sup>。欧州各国に比べれば関与も損失も少なかった日本であるが、それでも大正3年8月23日にドイツに対して宣戦布告して以来、日本海軍は黄海から遙か地中海に至る広大な海域に進出してドイツ海軍艦艇と対峙した<sup>6)</sup>。日露戦役までに比べて行動海域が一気に拡大されたにも関わらず、第一次世界大戦で日本海軍が運用した病院船は「八幡丸（やわたまる）」1隻に過ぎないが、日本参戦100周年を過ぎてなお、その詳細が明らかにされることはなかった。

病院船を含む日本海軍の医療史に関する最も包

括的な先行研究としては、小池らによる『海軍医務・衛生史』<sup>7)</sup>が挙げられる。小池らは、昭和60年の時点で入手し得た限りの史料を駆使して日本海軍創設から第二次世界大戦終戦までの医務衛生全般の歴史を全4巻にわたって詳細に網羅して記載し、多くの貴重な画像資料も供覧している。ところが、第一次世界大戦の部分に限っては海軍省医務局が発行した『大正三、四年戦役海軍医務衛生記録』<sup>8)</sup>(以下、「医務衛生記録」)や、昭和30年代に軍医らの回想を元海軍医務局長の高杉新一郎がまとめた『海軍奉仕五十年回顧録』<sup>9)</sup>(以下、「高杉論文」)に基づいた記述に止まり、大正期唯一の海軍病院船「八幡丸」については、わずかに当時の乗組軍医である船川尤三の追憶談とそれに基づく概要が見開き2頁に記されているに過ぎない。画像資料についても、「神戸丸」、「西京丸」および第二次世界大戦時の海軍病院船の写真はそれぞれ収載されている一方で、「八幡丸」の写真は一葉も示されていない。

現在でも陸上自衛隊衛生学校など各地の史料室で閲覧可能な「医務衛生記録」の巻五(最終巻)の巻末には、「医務衛生記録」の目次と『大正三、四年戦役海軍衛生史』<sup>10)</sup>(以下、「衛生史」)の目次とを対比した対照表が併録されている<sup>11)</sup>。この対照表からは、病院船「八幡丸」に関する事項は、「衛生史」のみに記載されていることが確認できる。即ち「衛生史」の発見こそが、第一次大戦中の病院船史解明のための十分条件となっていたといえる。『海軍医務・衛生史』の本文中には、第一次世界大戦の関連史料として、海軍軍令部から「部外秘」として刊行された「衛生史」について言及されているものの、「本書は現在見当たらない」<sup>12)</sup>と結ばれており、当時としては、入手はもとより存在確認すら儘ならなかったものと推察される。

日独開戦から100周年となる平成26年8月の時点で、陸上自衛隊衛生学校彰古館、しょうけい館、水交図書館、防衛研究所戦史史料室に、「衛生史」は収蔵されていないことが確認された一方で、第二次世界大戦直後の混乱期に米国へ持ち去られていた膨大な陸海軍資料の中に「衛生史」

の1組(全4巻)も含まれ、現在は米国議会図書館<sup>13)</sup>がこれを所蔵していることが判明した。防衛医科大学校図書館を経由して複写を入手できたことで、「医務衛生記録」の対照表に記されていた通り、そこに病院船「八幡丸」についての比較的詳細な記録が残されていることまで確認することができた。

本稿では、これまで顧みられることのなかった病院船「八幡丸」の実像を叙述することで、第一次世界大戦期という海軍医療史の空白部分を聊かなりとも補填することを試みる。

## Ⅱ 資料と方法

### 1 公刊史料

日独戦役(第一次世界大戦)の一方の当事者である日本海軍が残した医療活動に関する包括的史料として、以下の2件が現存していることは前述のとおりである。

『大正三、四年戦役海軍衛生史』(「衛生史」)

『大正三、四年戦役海軍医務衛生記録』(「医務衛生記録」)

「衛生史」は海軍軍令部が大正7年(1918年)に刊行した公刊戦史の一つである。開戦から4年目に刊行されている公式記録であることから、少なくとも現存する史料の中では最も信憑性が高いものと考えられる。全4巻で総ページ数は2741ページに及び、「部外秘」としての刊行であり、第二次世界大戦までに閲覧できた者は軍医等に限定されていたものと思われる<sup>14)</sup>。さらに、敗戦直後には焼却を免れた他の陸海軍文書とともに米軍に接収された<sup>15)</sup>ため、最近までその存在は「医務衛生記録」の第五巻に収載されている対照目次に痕跡を認めるのみであった。

「医務衛生記録」も公刊戦史であるが軍令部の「衛生史」に先んじて海軍省医務局が編纂を開始し「普通図書」の扱いで刊行したものであり、現在も陸上自衛隊衛生学校(彰古館)など多くの史料室等で閲覧に供されている。全5巻で総ページ数は2516ページであり、5巻合わせて1350冊が印刷された。主な内容は各部隊の軍医長から提出された報告書を行動方面別にまとめたものであ

り、本書において「八幡丸」は患者後送先の一つとして登場する程度に留まる。

## 2 海軍公文書

陸海軍文書は、上記のように米国に持ち出されて保管されているものの他、多くは昭和20年以降に焼却処分されてしまった<sup>15)</sup>。その一方で、こうした災難を免れた一部の文書が防衛研究所戦史研究センターで保存されている。同センターで整理され登録が完了した文書については、国立公文書館アジア歴史資料センター（アジア歴）のホームページからダウンロードすることが可能となっている<sup>16)</sup>。平成28年12月現在、上述の公刊戦史の他に、「八幡丸」から提出された筈の戦時詳報や診療日誌などの日誌類が残されている可能性を示す文書<sup>17)</sup>が確認されているものの、日誌類そのものは発見されていない。

## 3 呉市・呉海軍病院・呉海軍工廠

当時の呉市および呉鎮守府周辺の疾病構造や、「八幡丸」を含む多くの病院船艦装を担った呉海軍工廠については、呉市立図書館<sup>18)</sup>が所蔵する市史<sup>19)</sup>、県史<sup>20)</sup>、病院史<sup>21)</sup>などの資料を参照した。同図書館の他に、同工廠の跡地で当時の建物を現在も使用しているIHI呉事業所の呉史料館、さらに呉市海事歴史科学館、海上自衛隊第一術科学校教育参考館の書庫も渉猟した結果、多くの周辺知識が得られた一方で、本稿の調査対象とする病院船の艦装状況について各公刊戦史を超える知見を得ることはできなかった。

## 4 高杉論文

海軍病院船についての論説はこれまでも幾つか著わされている<sup>22)</sup>ものの、第一次世界大戦あるいは日独戦役について触れられることは少なく、「八幡丸」については名前のみ記されているか全く記載されない場合がほとんどである。そして、「八幡丸」に関する何らかの記述を含む数少ない文献の殆どは、『海軍奉仕五十年回顧録』（「高杉論文」）<sup>9)</sup>に依拠している。『海軍奉仕五十年回顧録』は昭和30年前後に元海軍省医務局長の高

杉新一郎が東京医事新誌に連載していた日本海軍衛生史の解説記事であり、その第18回で八幡丸乗組み軍医であった船川尤三の追憶談を紹介している。しかし、第一次世界大戦から（第二次世界大戦を挿んで）40年以上が経過した時点での追憶談であり、しかも「衛生史」や当時の新聞記事との対比においては指揮官の職名（軍医長⇔病院長）、出入港の日付、各室の配置甲板、呉における傳馬船転覆事故での犠牲者数（3名⇔6名）など、多くの齟齬が認められることから、記録としての信憑性は乏しい。小池らの『海軍医務・衛生史』、「八幡丸」軍医長であった軍医大監（当時）西勇雄の伝記である『大志をいだいて』<sup>23)</sup>や、月刊誌『世界の艦船』（特集・日本の病院船）<sup>24)</sup>など、多くの著述が「八幡丸」に関しては「高杉論文」に依拠しており、これらを孫引きしたと思われる幾つかの著述<sup>25)</sup>においても病院船「八幡丸」の指揮官の職名について「院長」と表記するなど「高杉論文」と同じ誤謬が引き継がれている。

その一方で「高杉論文」に依拠しない可能性が高い文献として、福井静夫による『写真 日本海軍全艦艇史 下巻』<sup>26)</sup>が挙げられる。「八幡丸」については「……青島・佐世保間を3回往復し、患者累計311名を輸送した。……」と記されているが、「高杉論文」には搬送した患者数について「多数」としか記されておらず、福井が「高杉論文」以外の史料を参照していた可能性は高い。しかも「311名」という数字は今回「衛生史」から集計した黄海行動3回分の合計収容人数（81+73+157=311）と一致していた（表3）。

## 5 病院船「博愛丸」および「弘済丸」

日独戦役において陸軍が病院船として徴備した日本赤十字社の病院船「博愛丸」および「弘済丸」の診療実績については、『大正三四年戦役日本赤十字社救護報告』<sup>27)</sup>（しょうけい館所蔵）を参照した。

## 6 後継病院船「笠戸丸」

「八幡丸」の次に海軍病院船として徴備された「笠戸丸」については、海軍省医務局が発行した

公刊戦史である『昭和二年支那騒乱事件海軍医務衛生記録 完』<sup>28)</sup>(陸上自衛隊衛生学校(彰古館)所蔵)の記載を採用し、病院船として徴備される前後の状況については、宇佐美の『笠戸丸から見た日本』<sup>29)</sup>を参照した。

## 7 検討の方法

まず、「衛生史」の記載に基づいて、「八幡丸」の艦装状況、配置された人員、搭載された医療用資器材を確認した後、黄海及び南洋における船内での診療活動を時系列にまとめながら、同時期に陸軍が徴備した「博愛丸」・「弘済丸」の状況と比較した。疾病構造については同時期の呉市や呉海軍病院の統計資料とも比較した。次に、洋上の医療機関として活動する中で生じた問題点を抽出し、後継病院船「笠戸丸」の諸元、艦装状況などを「八幡丸」のそれと比較しながら、各問題点に対する海軍の取り組みの跡を検証した。このように、水平・垂直の両方向で比較検討を行うことにより、病院船医療史における「八幡丸」の位置づけを試みた。

## III 結果

### 1 大正初期の疾病構造

大正時代とは、泉によれば「この時期はなお、わが国が伝染病(感染症)対策に終始した時代」<sup>30)</sup>であり、柳田も、当時の公衆衛生の行政は、「つい近頃までは只六種の伝染病と闘ってばかり居た」上に「新たに若干の新病を輸入した」<sup>31)</sup>、と記している。国勢院第一部による大正六年の死因統計では12の大分類の内、「伝染病及全身病」が千分比例209.7%で死因として最多であり、「消化器の疾患」(179.4%)、「神経系の疾患」(154.0%)、「呼吸器の疾患」(153.5%)がこれに続いている<sup>32)</sup>。

日露戦役での「西京丸」以降、歴代の病院船艦装を担った呉海軍工廠を擁する呉市では、大正期の伝染病発生件数が年ごとに記録されており、例えばコレラは大正5および9年に、痘瘡は大正6年に流行しているものの、「八幡丸」が艦装された大正3年の発生件数内訳は、腸チフス(94名)、

パラチフス(12名)、赤痢(20名)、疫痢(0名)、デフテリア(42名)、猩紅熱(1名)、流行性脳脊髄膜炎(1名)、コレラ(0名)、痘瘡(-)、であり、比較的平穏な年であったことが窺える<sup>33)</sup>。

一方で、主に軍人に対する診療を担っていた呉海軍病院における大正2年の病類統計によると、最多は「花柳病」の717名で、「伝染病及び全身病」の568名を上回っており、これらに「外傷」(431名)、「呼吸器病」(423名)、「栄養器病」(357名)が続いている。翌年の開戦後も、第2~4位に入れ替わりが見られるものの、「花柳病」は最多のままであった<sup>34)</sup>。また、「花柳病」の首位を反映してか、第一次世界大戦中に同病院で行われた手術296件の内、181件が「横痃剔出」であり、2位の「虫様突起切除」(21件)、3位の「痔瘻切開」(10件)に比べて突出していた<sup>35)</sup>。

### 2 「八幡丸」の艦装(表1, 図1)

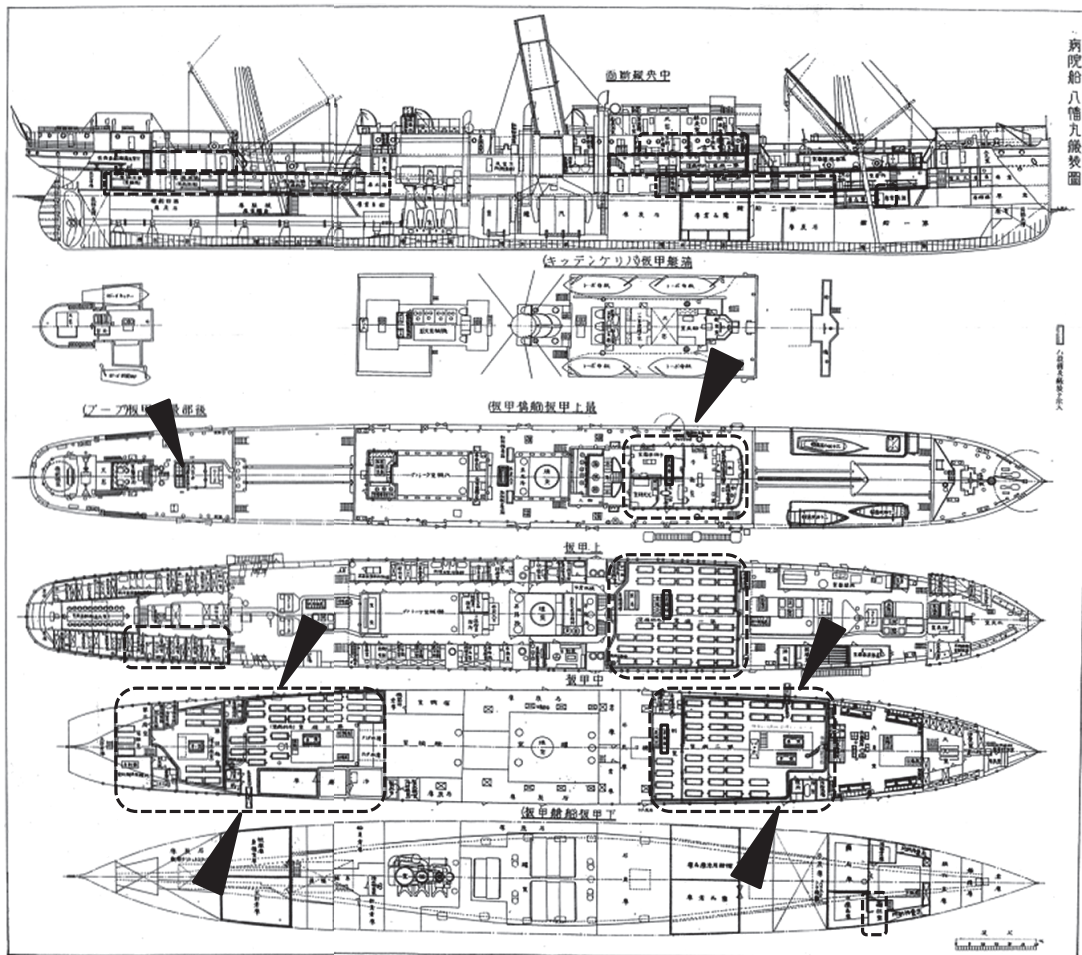
#### 1) 貨客船としての「八幡丸」

「八幡丸」は明治31年に英国グラスゴーで建造された総トン数3817トン(載貨喫水排水量6990トン)の貨客船(乗客定員175名)であった。日本郵船株式会社が所有し、当初は豪州航路に従事していたが、病院船として指定された大正3年8月までには上海航路に転じていた。このため、乗組み船員数は運航距離相応に削減され、冷蔵庫は一部閉鎖されていた。貯水槽も近海航路仕様となっていたため、病院船として南太平洋にまで進出する際にはこれらを改善することが死活的に重要であった<sup>36)</sup>。

『大正三年度戦時編成』では、「八幡丸」の他に大阪商船の「笠戸丸」も病院船の候補となっていた。しかし、実際に派遣される艦隊の規模に鑑みて、1隻のみが派遣されることになった<sup>37)</sup>。結果として、同じく8月18日付で「博愛丸」(上海航路)と「弘済丸」(関釜海峡航路)と2隻を日本赤十字社に引揚げられた日本郵船株式会社は、日独戦役で動員された3隻すべての病院船を固有船員と共に供出したことになる<sup>38)</sup>。

表1 病院船「八幡丸」行動概要

年	月	日	記 事
大正 3	8	18	徴傭を発令。
		20	病院船に指定。呉鎮守府所管、第二艦隊附属。軍医長以下乗組み士官補職。神戸から呉へ回航。
		21	海軍大臣が交戦国（独逸）への病院船名通知を外務大臣に依頼。
		21	『対独戦時編制実施心得書』発令。（220床）呉到着。艤装開始。
		23	《対独宣戦布告》乗組軍医ら着任。
		24	外務大臣が対戦国へ病院船名通告（「八幡丸」、「博愛丸」、「弘濟丸」）。
	9	8	呉鎮守府司令長官より、「準備完成次第、八口浦へ回航し、第二艦隊司令長官隷下に入る」旨の訓令。
		11	艤装および諸準備作業完成。
		12	病院船として完備。
		13	午前、呉出港。
		14	午後、八口浦到着。「石見」から患者2名収容。
		16	午後5時、同出港。
		17	午後、塔連島沖で第四戦隊に会合。
		18	午前、労山湾に回航。《陸軍、第二次揚陸開始》
		27	収容していた陸軍軍人の患者3名「博愛丸」へ転院。
		30	午後、「若宮丸」、「第三長門丸」遭難。負傷者13名を収容。労山湾発。
	10	2	午前、佐世保入港（第1回目）。佐世保海軍病院へ69名転院。
		3	佐世保入港前に乙掃海隊「第三長門丸」一等機関兵 中川原安太郎が脚気で死亡。
		3	午後、同出港。
		5	午前、労山湾着。以後、毎日数名の入院あり。
		6	軍艦「松江」より急性虫様突起炎・急性汎汎性腹膜炎で一等機関兵 大内千代松を収容。翌7日開腹手術して徐々に軽快。
		14	英海軍「トライアンフ」から戦傷患者2名を収容。赤痢患者多発のため第二病室を伝染病病室に転用。
		17	患者数71名中、赤痢29名、同疑2名。
		19	佐世保入港（第2回目）。佐世保海軍病院へ全患者（含、英国軍人2名）転院。
		19	第二病室改装（外科→伝染病）10月22日まで。伝染病用病床90床に増床。
		22	佐世保出港。
	11	24	労山湾着。「沖島」から患者39名を収容。
		29	労山港入港。「熊野丸」から戦傷者3名他を収容して出港。
		7	《青島陥落》
		10	労山港入港。「松江」から3名、「石見」から1名、負傷者を収容して出港。
		12	正午、佐世保入港（第3回目）。患者116名中、111名転院、5名海兵団入団。横須賀鎮守府に転属。
		13	横須賀回航の下令。
		14	佐世保から横須賀へ転院する17名を収容。
15		午前、佐世保出港。	
17		午後、横須賀入港。	
19		遠洋航海に備えた艤装変更および修理を開始。11月29日まで。	
12	20	無線電信機を設置。	
	28	《病院船定員表 改定（軍属の乗組みを許可）》海軍技手2名（無線電信員）転入。（翌日乗船。）	
	28	遠洋航海準備完了。	
	29	正午、運送船「加賀丸」とともにトラック島に向けて出発。	
	6	午後、トラック島着。夏島沖に投錨。陸戦隊に治療品補給。	
	8	午後、出港。《フォークランド沖で独逸東洋艦隊ほぼ全滅》	
	11	午前2時20分、東経159度52分で赤道通過。	
	17	午前、スヴァ入港（駆逐艦「海風」、運送船「鎌倉丸」が在泊中。「鎌倉丸」より自力で炭水搭載（英炭）。	
	19	「筑波」スヴァ入港。患者3名。	
	20	「鞍馬」「生駒」入港。「鞍馬」10名、同便乗1名、「生駒」68名、「山風」1名、それぞれから患者収容。	
大正 4	1	22	トラック島へ向け出発。台風遭遇（片舷27～28°動揺。）
		28	東経159度57分で赤道通過。
		30	午後、トラック島着。夏島沖投錨。「神奈川丸」から炭水補充（煉炭）。
		1	「鞍馬」、「筑波」、「生駒」、「磐手」、「日進」、「神奈川丸」、「鹿児島丸」、「鎌倉丸」、「加賀丸」と新領土で越冬。
		2	単独抜錨。
		4	四等水兵 藤倉政市が腸チフスで死亡。
		4	午前、サイパン島寄港。第一特別陸戦隊に、汽艇・傳馬船各1隻を交付。無線電信所から患者収容。午後出港。
		7	朝、横須賀鎮守府へ、「9日午前入港予定、転院予定患者数59名」、を通報。
		8	解傭を発令。
		10	午前、横須賀軍港へ帰着。患者101名中59名は転院。42名は海兵団入団。
12	横須賀を抜錨。		
14	海軍大臣が交戦国への病院船解傭通知を外務大臣に依頼。午後、呉入港。夕、傳馬船転覆事故で3名溺死。		
17	残務整理結了。		



(『大正三、四年戦役海軍衛生史』より改変)

図1 病院船「八幡丸」艦装図(『大正三、四年戦役海軍衛生史』より改変)

矢印はポート・ダヴィット, 載貨門など患者搬入経路を, 点線は主な医療区画の領域を示す。

## 2) 呉海軍工廠での艦装

呉海軍工廠は日露戦役において海軍が運用した2隻の病院船の内、「西京丸」の艦装を担当した実績を有しており、日独開戦に際しても日清戦役以来の病院船「神戸丸」に準拠して、「八幡丸」の艦装が行われた。『呉海軍工廠造船部沿革誌』<sup>39)</sup>には、「工事施行ハ八月下旬ヨリ九月中旬頃迄最モ輻輳シ此ノ一カ月ハ最モ意気緊張シ所謂戦時気分充滿シ労働時間延長公休日ノ出業等ヲ以テ予定ノ作業ヲ遂行セリ」と記されたあと、軍艦20隻、特設船5隻の名前が列記されており、病院船以外にも多数の造修作業が集中する中で艦装が行われたことがわかる。

「八幡丸」の艦装監督には軍医中監<sup>40)</sup>で鎮守府付軍医であった服部清一が指名されたが、8月23日に軍医長として軍医大監<sup>40)</sup>の西勇雄が着任すると、艦装監督も交代となった<sup>41)</sup>。

病院船への艦装に当っては、当時の戦時国際法である「ジュネーブ条約の原則を海戦に応用する(ハーグ)条約」<sup>42)</sup>に準じた外装が施されるとともに、『特設船舶艦装心得書』(大正2年12月改定)に準じて医療区画が設置された。一方で、当時の国際規約では特に定めが無かった赤十字の船体表示は行われず、ファンネル(煙突)は無地のままであった。これは、北清事変から活動を開始していた日本赤十字社の「博愛丸」・「弘濟丸」は勿論

のこと、日露戦役での「神戸丸」・「西京丸」では何れもファンネルに赤十字標章が塗装され、さらに昭和二年支那騒乱事件での「笠戸丸」以降の海軍病院船にあっては夜間でも病院船と識別されるように電飾まで追加されていることから見ると、特異な事例であると言える。

艦装に当たっては『大正三年度 呉鎮守府出師準備計画書 病院船笠戸丸、八幡丸 艦装方案及同艦装図』が用意されていたものの、それが建造されて間もない明治30年代の図面に基づいたものであったために、大正3年の艦装開始時の実状とは甚だしく乖離しており、艦装の現場では大混乱が生じた。このため、「八幡丸」の病院船解備後、呉海軍病院長、呉海軍工廠造船部、同造機部から、それぞれ異口同音に実地踏査（または現場調査）を踏まえた艦装計画立案の必要性が訴えられている<sup>43)</sup>。

こうした混乱にも関わらず、現場の柔軟な対応により艦装は9月11日までに完了し、調達上の混乱も呉海軍病院からの振替などで克服されて必要物品の搭載を終えた「八幡丸」は、9月13日に呉を出港し、第二艦隊に合流すべく朝鮮半島南西端の八口浦（はっこうほ）へ向かった<sup>44)</sup>。

### 3) 医療区画 (図1)<sup>45)</sup>

医療区画は、最上甲板、上甲板、中甲板、下甲板に分散して設置された<sup>46)</sup>。最上甲板に在った一等食堂～社交室が6区画に分割され、手術室、手術準備室、検査室、放射線室、外来診察室に改装された。一般に船体の動揺は機関から離れるほど大きくなるにも拘らず、機関から最も離れた最上甲板に手術室が設置されていることに疑問を感じざるを得ないが、恐らくは採光・換気・騒音・振動・粉塵（当時は石炭燃料）などを勘案した結果であり、当時としては妥当な配置であったのかも知れない<sup>47)</sup>。

患者収容施設は上甲板に第一病室（戦傷）78床、中甲板に第二病室（外科）76床が、それぞれ開設され、（当時の船内動力としては最も信頼性の高い）人力による患者昇降機が手術準備室、第一・第二病室を垂直に連結していた。第三病室

（内科）52床、第四病室（伝染病）16床、第五病室（隔離）6床は中甲板の船尾側に設けられ、これらとは別に、癲狂室（畳敷き）が下甲板右舷船首側に配置されていた。総病床数は238床であったが、士官病室の一部を除く全てが二重寝台（二段ベッド）で上下段の間隔は固定されていたため、病床での診察や処置には常に困難を伴った。

西軍医長は労山湾に停泊中の10月25日に艦隊付吉河軍医大監と上田大軍医<sup>40)</sup>とを伴って英国海軍の第七病院船「デルタ (Delta)」を視察し、その船体は八幡丸の2倍程度の大きさで、スウィング・ブーム（係船桁）を具え、病床は全て単装寝台であり、ベッド間の通路も十分な幅が確保されているなど空間的余裕を羨む一方で、搭載していた医療機器等の種類や設置方法など、機能性の面では「八幡丸」が優れている、と報告している<sup>48)</sup>。

同時期に陸軍で徴傭されていた、日本赤十字社の「博愛丸」・「弘濟丸」は建造の段階から病院船として設計されているためか、手術室は機関室の近傍に配置されており、動揺対策については「八幡丸」より優れていたものと思われる一方で、炭庫および炭取入口が医療区画に近接していることから、特に手術室内の空気清浄度が犠牲になっていた可能性は否めない。但し、陸軍の病院船運用は主に野戦病院での安定化処置後の搬送を主目的としたものであり、船内で手術を行うことは稀であったためか、手術室の作業環境を問題視した記述は残されていない<sup>49)</sup>。

### 4) 出征後の改変

黄海行動中の10月半ばに赤痢患者が多数発生して第四病室（16床）および第五病室（6床）だけでは隔離収容不可能となり、第二病室を転用する事態が生じた。このため、2回目の佐世保入港中（10月19日～22日）に、中甲板の第二病室（76床）が隔離病室に改装された。概略としては、出入り口を減らして患者の動線が交差しないように制御し、窓（天窗・舷窓とも）に防蠅金網を設置し、8脚の二重寝台を単装寝台に換えて周囲を帆布で覆うことで准士官以上の伝染病患者のため

の収容区画とした。このため総病床数は8床減ったが、伝染病用として差し引き90床が確保された<sup>50)</sup>。

青島陥落後の南洋行動に際しては横須賀海軍工廠造船部で11月19日から28日にかけて、無線電信機を装備し、貯水槽の一部を雑水用から真水用に変更して搭載真水量を60トン増やし、被服庫の一部を生野菜貯蔵用とするなどの改造が行われた。さらに、舷窓や露天甲板の出入り口に波除けの覆いが設置されるなど、日本海軍病院船としては初めてとなる遠洋進出に向けた改修が追加された<sup>51)</sup>。

### 5) 患者搬入手段

戦傷患者はダヴィットを用いて直接手術室のある最上甲板まで引き上げられたが、緊急性の低い担送患者は4か所の載貨門から搬入された。この他、伝染病患者専用の搬入口が船尾側に設けられ、他の患者と動線が交差しないよう配慮されていた<sup>52)</sup>。

解備後に西勇雄軍医長が提出した意見書<sup>53)</sup>に依れば、大型の艦船との相互横付けに使える防舷物が「八幡丸」には搭載されておらず、乾舷が近い艦艇から患者を搬入する場合であっても、一旦補助舟艇に患者を移して「八幡丸」に横付けさせ、そこから改めてダヴィットや載貨門を用いて揚収する必要があった。また、患者を搬送してきた舟艇を係留するための「スウィングング・ブーム」(係船桁)が設置されていなかったため、船体の動揺が大きい状況下での患者搬入には危険を伴うこともあったとされている。

### 6) 医療従事者

出征に際しては、軍医は軍医長を含めて8名(表2)<sup>54)</sup>、薬剤官は2名、看護要員としては49名(看護師1名、一等看護手2名、二等看護手4名、三等看護手2名、一等看護10名、二等看護2名、三等看護8名、雇看病夫20名)<sup>55)</sup>が乗船していた。これは、病院船条例で定められた看護要員数(看護手11名、看護29名)に対して、横須賀や舞鶴にも応援を要請したにも関わらず、看護手8名、看護20名までしか確保できなかったため、民間人を雇看病夫として雇用することで補ったことによる。中には医療以外の技術者(大工、写真家、僧侶、理容師など)が含まれており<sup>56)</sup>、結果として行動中には便利なこともあったという。病院船条例が改正されて軍属の乗組みが公認されたのは、青島陥落から3週間後の大正3年11月28日であったが、これは「海牙(ハーグ)第二回萬國平和會議」の決議を遵守して、非軍人を無線業務に従事させるべく乗船させるための改正であり、医療従事者の所要が考慮されたわけではなかった<sup>57)</sup>。

病院船の指揮官(海軍病院では「病院長」に相当)の職名は「軍医長」であったが、これは他の軍艦における最先任軍医と同じ呼称であったためにしばしば指揮官として認識されず、他部隊から発信された指揮官宛の文書が「船長」(日本郵船株式会社の一社員)に届くなどの不具合が発生した<sup>58)</sup>。

### 3 「八幡丸」の診療実績(表3, 4)

#### 1) 黄海行動<sup>59)</sup>(図2)

9月11日に艀装が完了し、13日に呉を出港した

表2 初期の乗組み軍医

職名	階級	氏名	
軍医長	軍医大監	西 勇雄	
軍医官	軍医中監	今井 外美太郎	(黄海行動のみ参加)
	軍医少監	田中 筠彦(たけひこ)	
大軍医		山下 奉表(ともよし)	
		草野 直夫	(黄海行動のみ参加)
		上田 一次	
中軍医		船川 尤三	
少軍医		重松 恵祐	



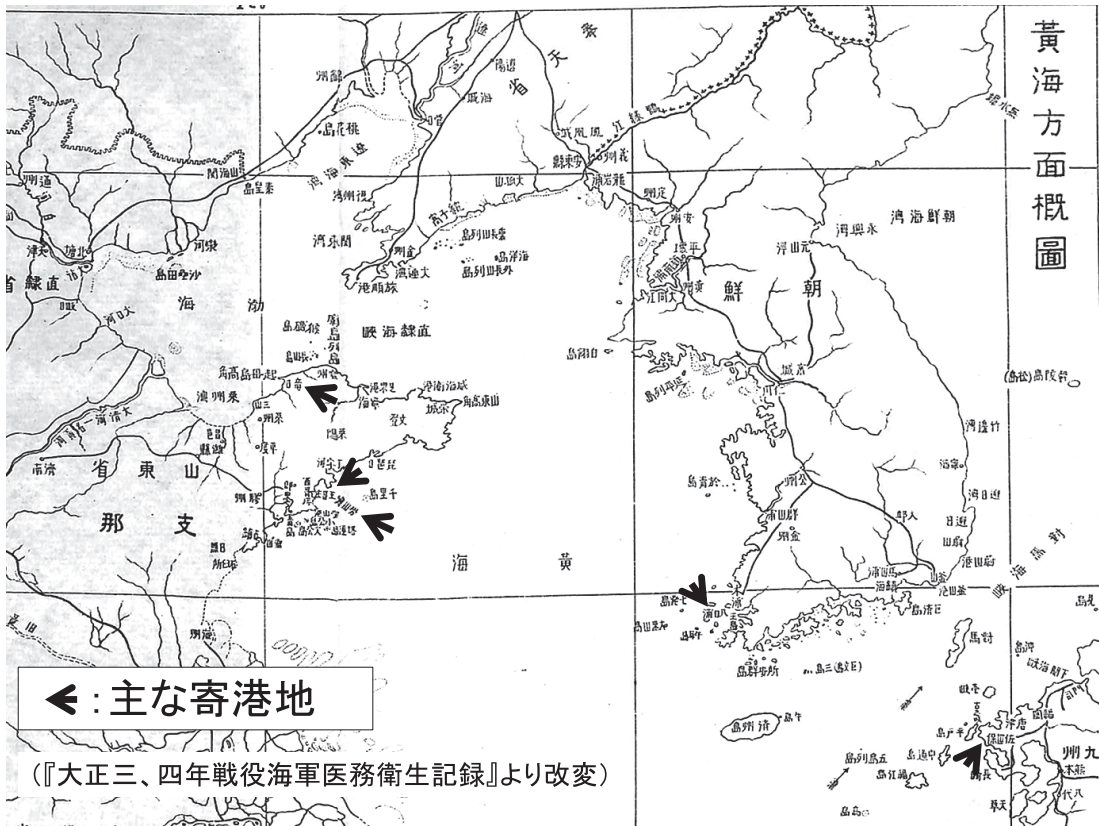


図2 黄海方面概図 (『大正三、四年戦役海軍医務衛生記録』より改変)

矢印は、「八幡丸」、および日本赤十字社の「博愛丸」・「弘済丸」が寄港した、佐世保、八口浦、労山湾、王哥庄、竜口の位置を示す。

表3 病院船「八幡丸」収容患者数(名)

	戦傷	外傷	内疾	外疾	花柳病	伝染病	入院総数	内地搬送数
黄海 1	13	5	27	4	17	15	81	69
黄海 2	2	3	20	6	10	32	73	71
黄海 3	8	11	76	2	19	41	157	116
小計	23	19	123	12	46	88	311	256
南洋	0	4	58	19	11	12	104	101
総計	23	23	181	31	57	100	415	357

(『大正三、四年戦役海軍衛生史』より集計)

八幡丸は、八口浦で艦隊に合流し、青島沖の労山湾に向かった。11月12日まで3回にわたって主に第二艦隊各艦からの患者を収容し加療しつつ佐世保に後送した。海軍以外にも、陸軍(野戦重砲兵第三連隊)の軍人3名(腸チフス2名, 脚気1名)や英国軍人2名(戦傷)を収容治療している。

第1回目は9月14日から30日までの間、八口浦から労山湾に至る海域で患者を受け入れ、病床が半分ほど埋まると佐世保に向かって出港。治療を継続しながら帰国すると、治癒した者は海兵団へ、さらに入院治療を要する患者は佐世保海軍病院へ搬送された。入港翌日には再び労山湾へ向け

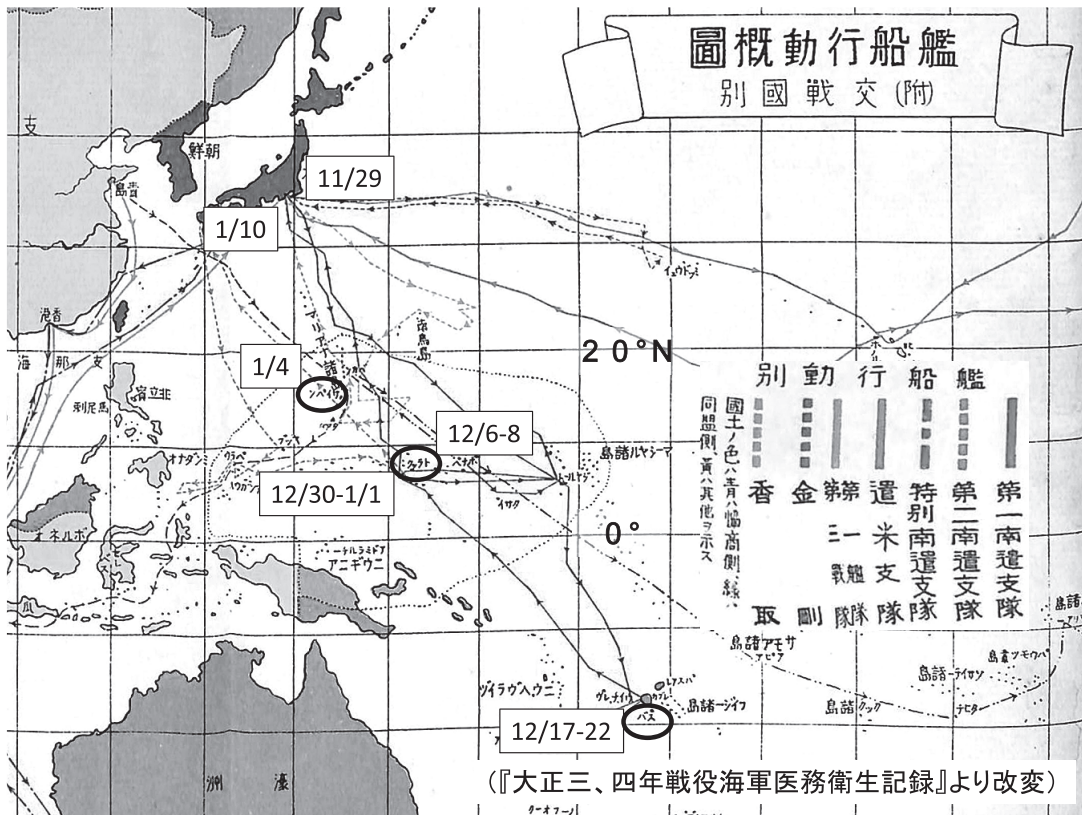


図3 南洋方面概図 (『大正三、四年戦役海軍医務衛生記録』より改変)

「八幡丸」は概ね第一南遣支隊の経路に沿って航行した。日付は「八幡丸」の停泊期間を示す。主な寄港地名(サイパン、トラック、スバ)を黒円で囲った。

て出港している。

第2回目は10月5日から10月17日まで労山湾に停泊し、前述の英国軍人2名を收容した他、赤痢患者の大量発生に遭遇した。これに対応すべく、佐世保海軍工廠で第二病室を改造し、伝染病用に90床を確保して労山湾に戻った。

第3回目は10月24日から青島陥落後も11月10日まで労山湾に停泊して患者を收容し、佐世保へ後送した後は横須賀鎮守府に転籍となった。

同時期の青島周辺で上陸作戦などを敢行した陸軍を支援していた「博愛丸」・「弘済丸」は、主に広島府の宇品港を策源地として労山湾・竜口・沙子口などで收容した傷病者をそれぞれ8回ずつ搬送しており、搬送した患者総数はそれぞれ1000名を超えている<sup>60)</sup>。しかも戦傷患者が4割以上を占めており、戦闘に遭遇した場合の厳しい医療所要

が窺われた<sup>61)</sup>。

## 2) 南洋行動<sup>62)</sup> (図3)

青島が陥落した後、横須賀鎮守府の所属となった「八幡丸」は、南遣支隊を支援してトラック島経由で南半球のスヴァ(フィジー)まで進出した。幸いドイツ海軍東洋艦隊の艦艇はその時点で太平洋から脱出していた<sup>63)</sup>ため、海戦に遭遇する僚艦は無く、この行動で「八幡丸」が戦傷患者を收容することは無かった。

南洋行動で收容した患者104名の内訳は、内科疾患58名、伝染病12名、外科疾患19名、花柳病11名、外傷4名、と大正2年に呉海軍病院を受診した軍人の患者構成に比べて感染機会の減少によるものと思われる花柳病の減少の他、大きな差は見られなかった。

戦闘に遭遇することは無かったものの、徴備直前まで上海航路に従事していた貨客船を日露戦役当時の「神戸丸」に準じた艙装（ほぼ近海仕様）を施したに過ぎない「八幡丸」にとっては、南半球への進出そのものが大きな試練であった。容量の不十分な貯水槽と実用に堪えない蒸留器による造水とでは、とても全航海中の真水所要を充足できるはずも無く、一方で、横須賀で満載した石炭もフィジー往復には不十分であった。このため、途中での真水・石炭補給は避けられず、元々搭載作業には不慣れ且つ人数も少ない乗員が三昼夜連続の粉塵にまみれた作業を強いられることもあった。既に患者を収容していた復路のトラック島における載炭作業では、入院患者にも換気不良かつ室温上昇という形で実害が及んだ<sup>64)</sup>。

### 3) 手術症例（表4）

全行動を通じての手術症例は29例であったが、戦傷患者に対するものは4例にとどまり、多くは泌尿器・肛門疾患に対するものであった。29例の内、開腹手術は急性虫垂炎の1例のみであったが、記録が残る重症患者3名の内の1名として、経過の概略が以下の通り記されている。

患者は軍艦「松江」一等機関兵。大正3年10月5日午前10時から下腹部痛が出現して増悪し、翌日「八幡丸」入院。体温39.8度、「腹壁ノ緊張甚シク」、翌朝も更に増悪したため手術が行われることになった。開腹すると混濁した黄灰白色の腹水が多量に湧出し、「腸管ハ甚シク鬱血膨満シ、

表4 病院船「八幡丸」手術症例の内訳（件）

・ 戦傷に対する手術	
弾片摘出+デブリドマン	2
手指切断+関節離断	1
挫創縫合	1
・ 開腹術	
虫垂切除+腹腔ドレナージ	1
・ 泌尿器・肛門	
「横痃」関連手術	21
肛門手術（外痔核・痔瘻）	3
	29

（『大正三、四年戦役海軍衛生史』より集計）

線維索性沈着物ヲ以テ所々癒着」していた。「虫様突起ハ殆正中線ニ近く、亦回腸ト癒着シ、其中央部ニ壊疽性穿孔アリ小豆大ニシテ固キ糞石ノ介在セルヲ認」め、虫垂切除、腹腔内洗浄、ドレーン留置が行われた。手術直後には「脈拍糸ノ如ク殆数フ可カラズ」と、敗血症性ショックを思わせる状態であったが、徐々に回復して経口摂取も可能となり、10月19日佐世保入港後に海軍病院へ転院している<sup>65)</sup>。

前述のとおり、同時期に呉海軍病院で行われた手術においても3分の2が泌尿器・肛門関係<sup>35)</sup>であり、出征中の「八幡丸」における手術内訳も成人男性の集団として内地と同様の傾向を示している点は興味深い。

### 4) 伝染病症例<sup>66)</sup>

第2回以降の黄海行動では艦隊内に赤痢の大流行が発生したため、収容患者の多くは赤痢（またはその疑い）で占められた。艙装時には伝染病用に16床、隔離用に6床が用意されていたものの、全く不足したため第2病室を転用してしのいだ。第2回黄海行動後の佐世保入港中に改装工事が行われ、伝染病用として差し引き90床が確保された。第3回黄海行動で収容した伝染病患者数は41名であったが、90床の内の82床が二重寝台であったことを考慮すると、実質的には満床に近い状況であったものと思われる。

全行動で2名の病死者が発生し、その内の1名（軍艦「生駒」四等水兵）では、喀痰検査で肺炎菌と結核菌とは陰性ながら、便培養で腸室扶私（チフス）菌が証明されている。（もう1名は脚気による死亡。）<sup>67)</sup>

### 5) 傳馬船転覆事故<sup>68)</sup>

「八幡丸」の全行動を通して最も多くの犠牲者が発生したのは、呉に凱旋した直後の傳馬船転覆事故であった。サイパンで汽船と傳馬船とを1隻ずつ現地の陸戦隊に届けた結果、帰国時の「八幡丸」に補助舟艇としては傳馬船1隻しか残されておらず、この1隻に久しぶりの地元を目指す25名が大量の土産と共に乗船して上陸棧橋に向かっ

た。ところが天候不良で海面状況が悪く、傳馬船は栈橋の直前で転覆し、3名の看護要員が犠牲となった。『大呉市民史』には、「八幡丸」の参戦から戦中の行動概要に加え、呉港への凱旋から事故発生、捜索、さらには葬儀の様子に至るまでを活写する記事が収められており、当時の一般的呉市民の「八幡丸」に関する認識も窺われる。(原文は旧漢字カタカナ表記)。

#### 病院船八幡丸椿事<sup>69)</sup>

南洋より横須賀へ帰港の八幡丸は風浪のため数時間を遅れて十四日午後一時四十分呉へ凱旋。(中略)風雪激浪に入港を遅れた同船の乗組員中、上陸最後の傳馬船は午後六時四十分上陸栈橋に七間の手前怒涛に転覆、乗組二十数名投出され、在泊各艦探照灯を集中し、最初に発見した伊吹通信艇ほか救助につとめ、二十二名を人事不省のまま八幡丸に送り手当後蘇生せしめるを得たが、なほ三名不明、九津見港務部長、人見中佐ら港務部傳馬船数隻と第十六号汽艇で捜索を続け、川原石よりは漁網を引いて海底を浚えるも効なく、午前一時中止、暁を待って伊吹一、工廠三、港務部一の五台の潜水器と二十数名の潜水夫により十数尋の海底を捜索、同九時四十分より十時四十五分の間三屍体を引揚ぐ。

殉難の澤田要一等看護手は原籍愛知県、呉市城山町四ノ六、呉海軍病院の看護術練習所高等科卒業、海軍病院調剤手を退いて薬種商を営み、のち工廠守衛を勤務、柔道四段、再役して本年十一月退役予定であったを八幡丸に乗組んだもの、遭難の夜深更生前の功により海軍省より特に海軍看護師に任ずる令達あり、八幡丸と海軍病院双方より葬儀幹事を出して十七日海軍葬儀を執行さる、遺骸は椰子の実など土産品と共に補充隊なる海兵団第二兵舎に安置、長官、工廠長弔詞を供え未亡人ら遺族を慰藉、午後一時半出棺、軍楽隊、儀仗隊、靈柩砲車に部下なりし八幡丸衛生下士卒付添い、同船西軍医長はじめ海兵団、病院より軍医、薬剤官、看護長、看護師以下数百名会葬、市民沿道に堵列して哀

悼を捧げ、導西館にて告別式執行、西軍医長弔文朗読、盛大に終る。臨時雇員一等看護手岡田逸平(二〇)は県下八奴郡出身、両城町の叔父の家で、二等看護手荒川嘉一郎(二八)は草里町一三九の自宅で共に十六日葬儀、部内多数の会葬あり、鎮守府よりは追賞具申中。

軍人であった澤田が特進(一等看護手→看護師)した他、軍属であった荒川と岡田とには勲八等が授与された<sup>70)</sup>。

#### 4 「八幡丸」の残した教訓(表5)

軍医長を務めた西勇雄は「八幡丸」が解備された後に、15000字を超える『病院船に関する意見』<sup>71)</sup>を提出している。その章立て(表5)は、医療はもちろんのこと、徴備すべき船体の諸元、造船・艤装、運航から生活共同体の運営にまで踏み込んだ広範多岐にわたるものであった。これは日清・日露両戦役で残された軍医による病院船所見<sup>72)</sup>とは、質・量ともに次元を異にするものであり、軍医中監<sup>40)</sup>の時期に呉海軍工廠軍医長を拝命するや全国に先駆けて呉に職工共済会病院(現・呉共済病院)を開設し、さらに初代病院長を務めた<sup>73)</sup>西勇雄ならではの広い視野と深い考察とが窺える。

まず船体について、航路補助金受給資格を喪失後は上海航路に従事していたため、「諸般の装備は近海航路を標準とし、手入れも頗る不行き届き」であった。「一葦帯水を隔てつる支那沿岸の如き近海ならば兎も角、今回の如き遠洋の任務に服する場合には船体の過小なる点において既に適當の病院船と認むる能わず。況や後章更に言及せんとする如き不便欠点を具有するに於いてをや。」と、不満は尽きなかったようである。船体の大きさについては「現時の艦隊状況に於いては最小限度を七千乃至八千噸とするを要す」と「八幡丸」の二倍に相当する船体を要望している<sup>74)</sup>。

当時の寄港地における燃料補給は石炭商に委託されるのが通例であった。遠洋進出に際して「八幡丸」が横須賀で搭載した「約一千噸」の石炭はスヴァ入港時には100トンにまで消費され、「鎌

倉丸」から自力で移載することになった。ところが、「八幡丸」の乗員は載炭作業に不慣れな上に人数も少なく、特殊かつ非効率的な構造をした「八幡丸」の給炭機構と格闘しながら約600トンの英炭を搭載するのに3昼夜を要した。幸い作業中は入院患者が居なかったことで、看護要員も載炭作業に動員できたのみならず、南洋という暑熱環境における3日間の船内密閉も許容されたが、もし重症患者が入院していた場合には、船内温度の上昇や換気不良などで重症化は避けられなかった可能性が高い。この事例から、徴傭の際には載炭量が大きく、炭庫から罐前へ搬入する設備を有する船を選ぶべきであることに加え、病院船に給炭する可能性のある給炭船には予め人夫の派出を指示しておくべきことを指摘している。現代の艦船では石油燃料が一般的となり、こうした苦労からは解放されているが、当時は万国医学会で病院船の燃料が話題として討論される時代でもあったという。

「八幡丸」の真水搭載量は、飲用に80トン、治療用に80トンのみであったため、遠洋行動に当たっては、船底艙を真水用に改装した。真水の所要量としては、収容患者100名に対して、治療用に1日3～4トン、一般飲用に1日5トンを要するが、外科患者の収容が増えた場合には一層多量を要する見込みであると、今回の経験を根拠とした目安を示している。

「八幡丸」の最上甲板は種々の構造物が並ぶ「狹隘錯雑せる」ものであったため、患者がリハビリテーションのために運動することも、乗員が総員集合することも、不可能であった。西軍医長は、この点に於いては先代の病院船である「神戸丸」「西京丸」にも「劣れる萬々なりと言うを得べし」と嘆いている。

艙装についても多岐に渡る提言を残しており、安全に患者を揚収するためにスウィング・ブーム（係船桁）の設置は病院船として必須であること。動物室よりも動物飼育箱の方が、天候暑熱に応じて移動できるので便利であること。病理実験室と、蒸気消毒器・乾熱滅菌器とは独立させるべきこと。病室として、重症患者病床、士官病

表5 『病院船に関する意見』内容一覧

1	船体
2	航続力および載炭
3	水罐および蒸留器
4	製氷機および冷蔵庫
5	最上甲板の空間
6	艙装
1)	洗濯機
2)	患者収容装置
3)	スウィング・ブーム（係船桁）
4)	動物室
5)	病理実験室
6)	病室
①	重症患者病床
②	士官病室
③	伝染病室
④	病床および配置・設備
⑤	各病室の設備
7)	手術室
8)	糧食庫
9)	病室昇降口および天窓
10)	食器消毒器
11)	理髪室
12)	汚物捨て口
13)	導水管
14)	機動艇
15)	職員居室
16)	無線電信機
17)	診療室
18)	浴槽
7	乗員
1)	信号手
2)	無線電信技手
3)	機動艇員
4)	剃夫、大工、割烹
5)	機関手、油差、石炭夫、水夫
6)	傳馬船員
7)	看護長（看護師）、筆記
8	需品
1)	患者被服物品洗濯材料
2)	航海長主管船匠部の需品増額を要する者
3)	主計長主管の需品
4)	食器
5)	防舷物
6)	信号旗
9	秘密図書
10	職名
11	旗章

室，は区別すべきであることと，伝染病室以外の病室にも必要に応じて伝染病室に転用できるように艦装の段階で全病室のドアや天窓に金網を設置しておくべきこと，を述べている。

職名については，特に切実な提案を残している。病院船指揮官の部下には，軍医のみならず，主計長，薬剤官，看護要員，軍属など，海軍病院長と同等の人員が含まれるばかりか，船長（民間人）も病院船指揮官の命を受けて船を運航することが定められていることから，病院船指揮官に「軍医長」という軍艦や運送船の軍医長と混同させるような名称は不適切であり，他の海軍病院と同じ「病院長」と呼称すべきことが述べられている。同様に，「乗組軍医官」，「乗組薬剤官」についても，それぞれ「部長」，「薬剤科長」などに改められることを要望している。

西は以上の他にも，必要な職種への配員，必要な物品・文書の配布など，逐一理由を付して要求しているが，裏を返せば，如何に人員・物品・制度の不備が重なる中での医療活動であったかを物語る意見書でもあった。

## 5 「笠戸丸」への反映<sup>75)</sup>

「八幡丸」の次に海軍病院船が出現したのは昭和2年7月であった。「昭和二年支那騒乱事件」に際して病院船として徴備された大阪汽船株式会社（現・商船三井）所有の「笠戸丸」（総トン数6011トン）が呉海軍工廠で艦装を受ける際には，「八幡丸」の病院船行動で得られた教訓が大いに反映された。艦装計画は事前調査を踏まえて立案され，無用の混乱は回避された。船体にはスウィング・ブームが設置されたことで，僚艦からの患者収容は安全かつ容易になった。二重寝台の上段は着脱式となり，病床での医療行為が必要な患者にも対応し易くなった。また，医療従事者の職名も大正5年からは他の海軍病院と同様に改められており，指揮官は軍医長ではなく「病院長」と呼ばれることになった。他にも，採光の工夫，寝台の配置，防蝨金網，造水・製氷装置の増設など細部に至るまで西の提案が悉く採用されており，日本の病院船は洋上の医療施設としての

合理性および実用性を急速に向上させることとなった。

## IV 考察

平成23年の東日本大震災の後，一部の国会議員等から「災害時多目的船」の建造が提案され，第三次補正予算から3000万円の調査費が計上された<sup>76)</sup>。しかし，その成果物に当たる内閣府の報告書における自国の病院船の歴史についての記述は全80頁中の僅か半頁と極めて薄い上に少なからぬ誤謬を含むものであった<sup>77)</sup>。その一因として，これまで日本の病院船について医療史的視点からの纏まった研究がほとんど行われて来なかったという事実が存在することは否めない。これまで病院船に関する論文や特集記事はいくつか発表されているものの，根拠となる資（史）料を明示しながら病院船について論じている，いわゆる学術論文の体裁をとっているものは少ない。しかも，他の戦役に比べれば一段と一般国民との関わりが薄く，「忘れられた戦争」<sup>78)</sup>とまで称される第一次世界大戦（日独戦役）で登場した病院船「八幡丸」をキーワードに含んだ文献は，医学中央雑誌（医中誌 Web<sup>79)</sup>），国立情報学研究所学術情報ナビゲータ（CiNii<sup>80)</sup>）で検索する限り1報も抽出されなかった（平成29年1月現在）。そうした状況の中，貴重な先行研究の一つである小池・有馬による『海軍医務・衛生史』は昭和61年の刊行以来，日本海軍の医療史について最も包括的な金字塔ともいえる存在であり，それ以降に軍事医療史の分野で発表された多くの論説で中心的参考資料として引用されている。ところが，第一次世界大戦が多くの日本国民にとって遠い存在であったことを反映してか，同書においても同大戦に配分された紙幅は他の戦役に比べて薄く，しかもその殆どは「医務衛生記録」に記載された範囲に留まっている。第一次世界大戦の初期に日本海軍が唯一の病院船として徴備した「八幡丸」の扱いに至っては，元海軍省医務局長の高杉新一郎が昭和30年代に東京医事新誌に連載していた『海軍奉仕五十年回顧録（十八）』（「高杉論文」）<sup>9)</sup>から抜粋した元乗組軍医の追憶談を紹介している，

わずか2頁のみである。その原因は、同書が依拠する「医務衛生記録」で「八幡丸」は患者の後送先として登場するのみであり、その一方で「八幡丸」の公式記録を含む唯一の公刊戦史である「衛生史」が、第二次世界大戦の後、長らく行方不明であり、小池らの調査によっても発見されなかったことにあると思われる。小池らもこの「衛生史」が刊行されていることについては本文中で言及しながら、結局のところ「本書は現在見当たらない」と記すに留まっていた。ところが第一次世界大戦開戦100周年を機に改めて調査したところ、「衛生史」は第二次世界大戦後の混乱期に渡米して米国議会図書館に保管されており、平成8年頃になって国立国会図書館がマイクロ・フィルムの形で購入した占領軍接收文書に含まれていたことが判明した<sup>81)</sup>。果たして、フィルムから引き延ばされた複写を閲覧すると、艦装図や貴重な船内写真<sup>82)</sup>のみならず、病院船指定・艦装から解備に至るまでの極めて詳細な内部事情や特異症例の経過概要についての記述が残されており、先行研究の空白を十分に補填しうる史料であることが判明した。

小池らが引用した「高杉論文」は、元乗組軍医の船川尤三の追憶談を十分に検証することもなく紹介したものと思われ、「衛生史」の記述と比べると複数箇所齟齬が認められる。特に甚だしいのは指揮官の職名についての記述であり、高杉は「……日露戦役まで病院船の指揮官は「軍医長」であったが「八幡丸」から「病院長」に改められた……」、とまで述べている<sup>9)</sup>が、「衛生史」に掲載されている西の意見書では、「軍医長」であったが故に業務上幾つかの問題が生起していたことから以後の病院船では軍医長ではなく「病院長」と、他の海軍病院に揃えることで業務を円滑化すべきであることを訴えており、高杉の記述とは真っ向から矛盾する<sup>83)</sup>。また、「八幡丸」が南洋から帰国した時期について、「高杉論文」ではトラック島で新年を迎えた後2月8日に横須賀に帰着して百余名の患者を横須賀海軍病院に送ったとしているが、トラック島から横須賀までの所要は当時でも約1週間<sup>84)</sup>であり、多数の患者を載せ

たまま1か月も洋上に留まることは考えにくいことから、これも誤謬である可能性が高い。さらに、解備後の傳馬船転覆事故についても、「高杉論文」では2月14日夜に発生したとされるが、当時の新聞綴りから編まれた『大呉市民史 大正編』では、それが1月14日に発生した事故であることや、搜索の状況に加えて犠牲者3名(≠6名)の葬儀の様子まで詳しく報じられており、そこで弔辞を述べたのは「西軍医長(≠病院長)」と記されている。大正3,4(1914,5)年の出来事について、当時の新聞と大正7(1918)年までに刊行された公刊戦史とで一致している記述を、第二次世界大戦を挿んで昭和30(1955)年以降に紹介された個人の追憶談の記述と比較した場合、特に日付や人数などの数字については、前二者の信頼性が勝るのは妥当と思われるが、職名についての誤謬に元海軍省医務局長である高杉が気づかないどころか、これに同意して強調まで加えているのは、高杉が日独戦役の当時に海軍大軍医<sup>40)</sup>の階級で呉海軍工廠附軍医に着任していた<sup>85)</sup>ことに鑑みても不可解に思われた。

今回の検討で、これまで未解明であった日独戦役で唯一の日本海軍病院船「八幡丸」について、船体の艦装から医療活動の概要までを明らかにすることができた。しかし、その一方で、実際に船内で診療された症例の詳細は特異な3症例を除いて不明のままである。「八幡丸」が提出している筈の日々の診療記録や、第二艦隊が取りまとめた提出している筈の戦時日報など、いわゆる日誌日報の類いは全く発見されていないことから、今後の調査次第で新たな知見が追加される可能性は残されている。

## V おわりに

### ——病院船「八幡丸」の医療史的存在意義——

今回の検討によって、病院船「八幡丸」は、黄海周辺のみを行動海域とした日露戦役当時の「神戸丸」に準じたままの艦装・搭載物品に、制度的不備までが加わった、比較的困難な状況にありながら、日本海軍病院船として初めて赤道を越えて南半球まで進出し、黄海から南太平洋に至る広い

海域で生じた医療所要に応じて任務を完遂したことが確認された。そうした、前例の無い長距離航行で得られた知見を次期病院船「笠戸丸」に引き継いだことで、「八幡丸」は日本海軍病院船が近海仕様から遠洋仕様へと進化する一大転換点となっていたことも判明した。特に、大正5年の『特設艦船部隊令』<sup>86)</sup>で示された病院船の職員構成や、『昭和二年支那騒乱事件海軍医務衛生記録完』<sup>75)</sup>に残る病院船「笠戸丸」の艦装に関する記述においては、西軍医長が残した『病院船に関する意見』<sup>71)</sup>の記述が所によっては字句までもそのままで盛り込まれている部分が散見され、前例の無い困難な使命を完遂した西勇雄の海軍内における発言力や影響力までが窺われて興味深い。

## 注

- 1) 第一次世界大戦の当時に発効していた病院船に関係する戦時国際法は、「ジュネーブ条約の原則を海戦に適用する(ハーグ条約)(外務省条約局(1929))であった。現在は、第二次世界大戦後に批准された「海上にある軍隊の傷者、病者及び難船者の状態の改善に関する千九百四十九年八月十二日のジュネーブ条約(第二条約)」「昭和二十八年十月二十一日条約第二十四号(防衛省ホームページ>所管法令等>関係条約等>海上にある軍隊の傷者、病者及び難船者の状態の改善に関する千九百四十九年八月十二日のジュネーブ条約(第二条約) <http://www.mod.go.jp/j/presiding/treaty/geneva/geneva2.html> (最終閲覧2016.12.29))」で病院船の満たすべき要件が規定されている。
- 2) 原(2014)
- 3) 海軍省医務局(1904, 1910, 19--), 海軍有終会(1938), 東京偕行社(1915)など。
- 4) 海軍省医務局(1904) p. 304, 海軍省医務局(1910) p. 56
- 5) Cooter(1993) p. 1544
- 6) 三野(2004) p. 56, 253-257
- 7) 小池/有馬(1986)
- 8) 海軍省医務局(1917-9)
- 9) 高杉(1957)
- 10) 海軍軍令部(1918)。同書に収載されている画像資料については、柳川(2017)参照。
- 11) 海軍省医務局(1917-9) 第五巻 巻末附録一 p. 2-8
- 12) 小池/有馬(1986) 第二巻 p. 48
- 13) 田中(1995) p. 322  
米国議会図書館(The Library of Congress)のURLは、<https://loc.gov/>(最終閲覧2016.12.29) 日本を含むアジア地域の資料はRoom LJ150で収蔵。
- 14) 海軍省医務局(1917-9) 第五巻 巻末附録二 p. 2-3
- 15) 原剛(2000)
- 16) アジア歴史資料センターのURLは、<https://www.jacar.go.jp/>(最終閲覧2016.12.29)
- 17) 大正4年第2艦隊戦時日誌 JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C10080003800, 大正3年8月 第1, 2艦隊戦時日誌 第1艦隊任務報告(防衛省防衛研究所所蔵)に、「八幡丸」からの報告が艦隊司令部に提出されているとする記述が残されている。
- 18) 呉市立図書館のURLは、<http://library.kure-city.jp/>(最終閲覧2016.12.29)
- 19) 弘中(1953), 呉市史編さん委員会(1976)
- 20) 広島県(1981)
- 21) 千田(2004, 2006)
- 22) 藤田(2002)など。
- 23) 恒松(1997)
- 24) 小林(1995)など。
- 25) 泉(2012), 猪(1995)など。
- 26) 福井(1994)  
この写真集には「全艦艇史」という書名ながら海軍艦艇に限らず海軍病院船についても、全13隻中10隻(「神戸丸」, 「西京丸」, 「八幡丸」, 「笠戸丸」, 「室戸」, 「朝日丸」, 「橘丸」, 「氷川丸」, 「高砂丸」, 「天応丸」)の貴重かつ比較的鮮明な写真が収載され、それぞれに短い説明が付されている。但し、「八幡丸」の撮影時期および場所について、「大正3年9月11日, 佐世保」と記されているが、「衛生史」によれば、呉での艦装完了が9月11日であり、その2日後の呉出港から最初の患者を佐世保海軍病院へ搬送した10月2日までの間に佐世保に入港した公式記録は無い。また、呉を出て翌14日に八口浦に到着していることから、出征前に佐世保に寄港した可能性は低いことから、日付または地名の何れかが誤っているものと考えられる。また、「……大正3年8月病院船に指定(中略) 同月13日, 呉を出港。……」(傍点は筆者)と記されているが、公式には1か月後の9月13日午前に呉を出港していることから、「同」月は「翌」月の誤りであると思われる。  
福井静夫が蒐集した膨大かつ貴重な艦船写真のコレクションは、同氏の没後に呉市海事科学歴史館(大和ミュージアム)へ写真以外の資料と共に移譲されている。その経緯については、小笠原(2007) p. 62-66を参照。
- 27) 日本赤十字社(1917)
- 28) 海軍省医務局(19--) p. 177-巻末
- 29) 宇佐美(2007)
- 30) 泉(2014)
- 31) 柳田(1970) p. 363-376  
明治13年の「伝染病予防規則」で、伝染病はコレラ、腸チフス、赤痢、ジフテリア、発疹チフス、痘



瘡の6種と定められていたが、明治30年の「伝染病予防法」ではバラチフス、猩紅熱、流行性脳脊髄炎、ペスト、日本脳炎を加えた11種に拡大された。また大正8年になって、旧「結核予防法」が制定された。

32) 国勢院第一部 (1921) p.7-11

当時の国勢院が定めた12の大分類とは、「伝染病及び全身病」、「呼吸器の疾患」、「消化器の疾患」、「神経系の疾患」、「老衰」、「奇形および幼児に固有なる疾患」、「泌尿器および生殖器の疾患」、「血行器の疾患」、「外因による死」、「皮膚および運動器の疾患」、「妊娠および産によるもの」、「不明の診断および不詳の原因」。但し、この統計では、「病態」と「臓器」と2種類の尺度が混在していることで、消化器系の感染症、呼吸器系の感染症が、それぞれどちらに分類されたのかは不明であるものの、「八幡丸」では例えば「赤痢」と診断されたものは「伝染病」に、「赤痢(疑)」で確定診断に至らなかったものは「伝染病」ではなく「内科疾患」に分類されており、これが当時の一般的な分類であるとするれば、やはり感染症による死亡者が最多であったと推測される。

入手しえた中では直近の全国統計である本書の主題は大正7年の統計であるが、同年はスペイン風邪の流行によって「伝染病および全身病」が一層突出した年であったことから、本稿では前年比較のために掲載されていた大正6年の統計を採用した。尚、本書の冒頭には、この統計は内地における内地人の死亡のみを対象としており、当時日本領土であったものの、朝鮮、台湾、樺太における死亡は含まれていない旨の但し書きが記されていることから、外地における感染症流行は除外されているものと見なすことができる。

33) 呉市史編さん委員会 (1986) 第4巻 p.499

34) 海軍省医務局 (1917-9) 巻四 p.423-424

但し、「外傷」の内およそ3分の2は軍人ではなく軍属が作業中に受傷したものであり、病院船に収容された患者と疾病構造を比較する上では、公務中の受傷・罹患以外では海軍病院を受診できない層を除外するべきかも知れない。

35) 同上 p.438-440

36) 同上 p.234-235

37) ここで、なぜ「笠戸丸」より古くて小さな「八幡丸」が選ばれたのかは不明である。諸元よりも来歴に理由を求めるとすれば、「笠戸丸」が日露戦役での鹵獲品(ロシア海軍での旧名:Kazan)であったのに対し、「八幡丸」は同戦役で仮装巡洋艦として活躍した実績を有する。

38) 日本郵船株式会社 (1935) p.277-278 の表では、同社が日独戦役で陸海軍に供出した船舶が27隻に上ることが示されている。

39) 呉海軍工廠造船部 (1925) p.21-22

40) 海軍省 (1939) 巻四 p.366

当時の軍医総監は海上自衛隊の海将(補)に、軍医大(中・少)監はそれぞれ一(二・三)等海佐に相当。同様に、大(中・少)軍医はそれぞれ一(二・三)等海尉に相当する。

41) 海軍軍令部 (1918) 巻四 p.14

42) 外務省条約局 (1929) p.601-644

43) 海軍軍令部 (1918) 巻四 p.274, 276-278

44) 同上 p.62

45) 各部の写真は、柳川 (2017) を参照。

46) 各甲板に配置された医療区画の一覧表は、海軍軍令部 (1918) 巻四 p.33-35

「高杉論文」では「上甲板に衛生試験室、殺菌水製造室、手術室、動物室その他25室、中甲板に4個の内科および伝染病室、製氷機室その他9室等を新設した」と記されているが、実際には、衛生試験室・手術室は最上甲板に、殺菌水製造室はボート甲板にそれぞれ配置され、動物室は存在せず、中甲板の病室は4個ながら1つは外科病室であった。

47) 造船協会 (1935) で当時の代表的な船舶48隻の艦装図が確認できる。

48) 海軍軍令部 (1918) 巻四 p.241-244

49) 日本赤十字社 (1917) p.24-52

50) 海軍軍令部 (1918) 巻四 p.83

51) 同上 p.41-42

52) 同上 p.37-38

53) 同上 p.253-254

54) 同上 p.46, 49-52

山下奉表は“マレーの虎”と呼ばれた陸軍大将山下奉文(ともゆき)の兄。

55) 同上 p.47

当時の看護要員の階級は、士官相当は「看護師(または看護長)」, 下士卒として「一(〜三)等看護士」, 「一(〜三)等看護」, 軍属として「備看病夫」。

56) 同上 p.48

57) 同上 p.42

58) 同上 p.266-267

59) 同上 p.62-65, 85-90

60) 日本赤十字社 (1917) p.50-52

収容した患者総数は、「博愛丸」が1013名(内、戦傷428名)、「弘濟丸」が1040名(同427名)であった。

61) 川野 (1997) によれば、竜口上陸作戦や青島包囲戦で陸軍からは1200名以上の死傷者が出ている。

62) 海軍軍令部 (1918) 巻四 p.65-68

63) 上條 (1941) 巻頭航跡図

64) 海軍軍令部 (1918) 巻四 p.246-248

65) 同上 p.95-96

66) 同上 p.85-88

67) 同上 p.96-97

68) 同上 p.158-159

69) 弘中 (1953)

『大呉市民史』は、呉市内の旧家(澤原家)で保管

されていた「芸備日日新聞」,「呉公論」,「呉日日新聞」などの新聞綴りを元に昭和28年に編まれたもの。

ここで、死亡した雇看病夫の氏名について、「衛生史」では西軍医長から海軍省医務局長に宛てた報告書の転載部分を含めて4か所で記載されているものの、何れも「荒川嘉一郎」・「岡田伊作」となっており、岡田の名前が『大呉市民史』とは異なっている。現存する戦死者名簿である『大正三四年戦役海軍戦死者忠魂録』<sup>70)</sup>では「衛生史」と同じ「岡田伊作」での表記となっている。

尚、この事故の時季と規模については「衛生史」でも『大呉市民史』と同じく、1月の発生で犠牲者は3名と記されており、「高杉論文」における、事故の発生を2月、犠牲者を6名、とする記述はやはり誤謬である可能性が高い。

#### 70) 海軍水交社(1916)

本書は「海軍水交社蔵版」ではあるが、「本書は海軍大臣から天皇陛下、皇太子殿下に献上せられたり」との記述や、凡例を海軍軍令部戦史編纂委員が記していることから、実質的には海軍軍令部の編著であると思われる。尚、奥付の発行者にある「和田利彦」は春陽堂の第4代社長。

#### 71) 海軍軍令部(1918) 巻四 p.244-267

#### 72) 海軍省医務局(1904) p.371-377, 海軍省医務局(1910) p.117-119

#### 73) 千田(2004) p.44, 48

この時、副院長を務めた大軍医(当時)田中筠彦が、「八幡丸」では再び西勇雄の下で第二部長(内科)を担当している。

#### 74) 「八幡丸」の総トン数は3816トンながら排水量は既に6990トンであったことから、この記述は総トン数での7000トン以上を意図したものである。念頭には西らが労山湾で目の当たりにした英国海軍の病院船「デルタ(Delta)」があったものと想像される。

平成28年12月現在、総トン数7000トン前後の客船(「びなす」や「べにりあ」など)は、東北-北海道間など主に近海で運行されている。一方、現役病院船として米海軍が保有する2隻(「マーシー(Mercy)」および「コンフォート(Comfort)」)は、総トン数で約10万トンの同型タンカーから改造された姉妹船(排水量69552トン)であり、「マーシー」はサンディエゴを定係港として太平洋~インド洋周辺を、「コンフォート」はノーフォークを定係港として大西洋~カリブ海周辺を、それぞれ所掌している。

#### 75) 海軍省医務局(19--) p.177-386

#### 76) 内閣府、平成24年度行政事業レビュー(事業番号0073)([http://www.cao.go.jp/yosan/kanshi\\_korituka/pdf/24\\_0073.pdf](http://www.cao.go.jp/yosan/kanshi_korituka/pdf/24_0073.pdf))(最終閲覧2016.12.29)によれば、3000万円の内、2200万円が執行されている。

#### 77) 内閣府(2013) p.17

平成24年度の報告書で述べられた「わが国の病院

船の歴史」の全文は以下のとおり。

「(2) わが国の病院船の歴史 わが国では、ジュネーブ条約で保護される傷病者等輸送船舶・艦艇として、日清、日露戦争時から第二次世界大戦終了までに約30隻が運航された。当時の病院船は、そのほとんどが民間船舶を軍が徴用し、白色塗装、病室区画の設置等の短期間での改造を行う形で運航された。現在、横浜港の山下埠頭に繋留されている氷川丸等がその代表例である。氷川丸は、政府徴用船及び海軍特設病院船となり、終戦までに3回も触雷しながらも沈没を免れた。白い船体には、緑色の帯、赤十字の大きなマークをつけ、夜間は病院船であることを電飾によって示していた。その諸元は、総トン数11,622トン、全長163m、速力18ノットであった。病院船の存在は、当時の国民にも広く知られており、例えば昭和10年代に流行した戦時歌謡では、曲名に“病院船”を冠した曲が複数あった(例えば「病院船の歌」中村淑子、大谷冽子)。このような病院船は、第二次世界大戦までは運航されていたものの、戦後は運航されていない。」

上記の調査結果が、災害時多目的船についての検討を行う上で必要十分な「わが国の病院船の歴史」であるとは同意しがたい。内容的にも、ジュネーブ条約が日清戦争の頃から病院船に関しても規定していたかのように記されているばかりか、日本が運用した病院船の概数(小林(1995)によれば陸海軍合わせて80隻以上とされる。)、日本から病院船が消えた時期(郵船OB氷川丸研究会(2008)によれば戦後の昭和22年まで氷川丸は病院船として運行されていたとされる。)についても、記述は疑わしい。

#### 78) 山上(2010) p.4

#### 79) 医学中央雑誌(<http://www.jamas.or.jp/>)(最終閲覧2017.1.30)

#### 80) 国立情報学研究所学術情報ナビゲータ(CiNii)(<http://ci.nii.ac.jp/>)(最終閲覧2017.1.30)

#### 81) 防衛医科大学校図書館から国立国会図書館への照会によって確認。(2014.11.4)

#### 82) 柳川(2017)

#### 83) 「病院船条例」から「特設艦船部隊令」に移行したのは「八幡丸」が解備された翌年の大正5年であり、大正5年以前は「病院長」ではなく「軍医長」であったことは、昭和15年に出版されていた『海軍制度沿革(巻三)』を参照することで、「高杉論文」が執筆された昭和30年頃にも確認可能であった。

#### 84) 往路で11月29日に横須賀を出港した「八幡丸」が、7日後の12月6日にトラック島に到着していることについては、「衛生史」と「高杉論文」とで一致している。

#### 85) 海軍省医務局(1917-9) 巻四 p.516

#### 86) 海軍省(1939) 巻三 p.1544-1550

## 一次文献および公刊史料

- 第二艦隊司令部. 大正四年第二艦隊戦時日誌. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C10080003800 (防衛省防衛研究所所蔵)
- 外務省条約局. 「ジュネヴァ」条約ノ原則ヲ海戦ニ応用スル条約. 外務省条約局 編 条約彙纂, 第2巻 第1部 (一般国際条約集). 東京: 1929. p. 601-644 (国立国会図書館所蔵)
- 海軍省. 特設艦船部隊令. 海軍制度沿革 巻三. 東京: 海軍大臣官房; 1939. p. 1544-1550 (国立国会図書館所蔵)
- 海軍省. 海軍武官官階表. 海軍制度沿革 巻四. 東京: 海軍大臣官房; 1939. p. 366 (国立国会図書館所蔵)
- 海軍軍令部. 大正三, 四年戦役海軍衛生史 巻四. 東京: 海軍軍令部; 1918 (米国議会図書館所蔵)
- 海軍省医務局. 日清戦役海軍衛生史. 東京: 海軍省医務局; 1904 (陸上自衛隊衛生学校所蔵)
- 海軍省医務局. 日露戦役海軍衛生史. 東京: 海軍省医務局; 1910 (海上保安大学校図書館所蔵)
- 海軍省医務局. 大正三, 四年戦役海軍医務衛生記録. 東京: 海軍省医務局; 1917-9 (陸上自衛隊衛生学校所蔵)
- 海軍省医務局. 昭和二年支那騒乱事件海軍医務衛生記録 完. 東京: 海軍省医務局; 19-- (発行年不詳) (陸上自衛隊衛生学校所蔵)
- 海軍水交社. 大正三, 四年戦役海軍戦死者忠魂録. 東京: 春陽堂; 1916. p. 232-253 (国立国会図書館所蔵)
- 海軍有終会. 近世帝国海軍史要. 東京: 海軍有終会; 1938 (国立国会図書館所蔵)
- 国勢院第一部. 大正七年日本帝国死因統計 記述編. 東京: 東亜印刷; 1921 (国立国会図書館所蔵)
- 呉海軍工廠造船部. 呉海軍工廠造船部沿革誌. 広島: あき書房; 1981 (1925 初版)
- 日本赤十字社. 大正三四年戦役日本赤十字社救護報告. 東京: 日本赤十字社; 1917 (しょうけい館所蔵)
- 東京偕行社. 大正三年日独戦役写真帖. 東京: 東京偕行社; 1915 (国立国会図書館所蔵)

## 二次文献

- 千田武志. 呉市と呉共済病院の100年. “2004” 呉共済病院創立100周年記念事業企画委員会. 呉共済病院100年史. 呉: 呉共済病院; 2004. p. 31-51
- 千田武志. 大正期の呉海軍病院. 呉海軍病院史編集委員会. 呉海軍病院史. 呉: 国立病院機構呉医療センター; 2006. p. 71-94
- Cooter R. War and Modern Medicine. In: Bynum WF, Porter R, editors. Companion Encyclopedia of the History of Medicine Vol. 2. London: Routledge; 1993. p. 1536-1573
- 藤田一之. 我が国の病院船 過去・現在・未来. 病院

- 設備 2002; 44(5): 609-614
- 福井静夫. 写真 日本海軍全艦艇史 下巻. 東京: KKベストセラーズ; 1994. p. 905
- 原剛. 陸海軍文書について. 戦史研究年報 2000; 3: 109-119
- 原剛. 概説 戦傷病者に対する医療・援護体制. 軍事史学 2014; 49(4): 38-49
- 弘中柳三. 大正四年(一月)病院船八幡丸椿事. 大呉市民史 大正篇(上巻). 呉: 中国日報社; 1953. p. 75-76
- 広島県. 広島県史 近代2 通史IV. 広島: 広島県; 1981
- 猪初男ほか. 病院船の活躍. 海軍歴史保存会. 日本海軍史 第5巻 部門小史(上). 東京: 第一法規; 1995. p. 686-688
- 泉孝英. 日本近現代医学人名事典. 東京: 医学書院; 2012.
- 泉孝英. 近代医学の145年—日本近現代医学人名事典の人々—. 日本医史学会月例会(平成26年11月) 2014. 東京(順天堂大学センチュリータワー)
- 上條深志. 戦線一万五千海里. 東京: 南洋群島文化協会; 1941
- 川野暁明. 青島攻略戦. 原剛/安岡昭男編. 日本陸海軍事典. 東京: 新人物往来社; 1997. p. 55-56
- 小林義秀. 日本病院船始末記. 世界の艦船 1995; 503(11): 146-153
- 小池猪一/有馬玄. 海軍医務・衛生史. 東京: 柳原書店; 1986.
- 呉市史編さん委員会. 医療・衛生. 呉市史 第4巻. 呉: 呉市役所; 1986.
- 三野正洋. 日本海軍の戦い. 死闘の海. 東京: 光人社; 2004. p. 253-257
- 内閣府. 平成24年度「災害時多目的船(病院船)に関する調査・検討報告書」. ([http://www.bousai.go.jp/jishin/sonota/pdf/h24tamokutekisen\\_houkokusyosyo.pdf](http://www.bousai.go.jp/jishin/sonota/pdf/h24tamokutekisen_houkokusyosyo.pdf)) (最終閲覧2016.12.29) 2013.
- 日本郵船株式会社. 日本郵船株式会社五十年史. 東京: 日本郵船株式会社; 1935. p. 277-278
- 小笠原臣也. 戦艦「大和」の博物館 大和ミュージアム誕生の全記録. 東京: 芙蓉書房出版; 2007.
- 高杉新一郎. 海軍奉仕五十年回顧録(十八). 東京医事新誌 1957; 74(4): 47(239)-48(240)
- 田中宏巳. 米議会図書館所蔵占領接收旧陸海軍資料総目録. 東京: 東洋書林; 1995. p. 322
- 恒松忠義. 大志をいだいて. 熊本: 東急印刷; 1997.
- 宇佐美昇三. 笠戸丸から見た日本. 東京: 海文堂; 2007.
- 山上正太郎. 第一次世界大戦. 東京: 講談社; 2010.
- 柳川鍊平. 病院船「八幡丸」図譜. 日本医史学雑誌 2017; 63: 473-494
- 柳田國男. 貧と病. 明治大正史 世相篇. 定本 柳田

國男集 第二十四卷. 東京: 筑摩書房; 1970. p. 362–376  
郵船OB水川丸研究会. 水川丸とその時代. 東京: 海文

堂; 2008.  
造船協会編. 日本近世造船史 大正時代 附圖. 東京: 工業図書; 1935. (IHI 呉事業所呉史料館所蔵)

## Medical Operation of the Hospital Ship *Yawata Maru* in the German-Japanese War (1914–1915)

Rempei YANAGAWA

Department of Anatomy and Life Structure, Faculty of Medicine, Juntendo University

The medical operation of the Imperial Japanese Navy (IJN) in the German-Japanese War (1914–1915), especially regarding its hospital ship, had rarely been investigated until the centennial anniversary of the declaration of war against Germany. We found the only official record of the medical operation of the IJN during the war, including that of the hospital ship the *Yawata Maru*, in a document titled “The History of Medical Affairs of the Imperial Navy in the War of 1914–1915” (『大正三, 四年戦役海軍衛生史』) at the Library of Congress (USA) for the first time after the World War II and obtained a copy of it. Comparing all the records from various aspects, the details about the medical operation of the *Yawata Maru* have been elucidated precisely. Finally, the *Yawata Maru* was found to have marked a turning point from the thalassic to the pelagic in the history of hospital ships in IJN, as it provided sufficient medical support not only to the 2<sup>nd</sup> fleet of IJN in the Yellow Sea around Tsingtao but also to battle groups in the South Pacific en route to Fiji, as the first Japanese hospital ship dispatched over the equator.

**Key words:** *Yawata Maru*, hospital ship, navy, the German-Japanese War (World War I, the Great War)